



中高生とともに差別と闘う

「大阪だけの問題」ではない!

吉成タダシ



ヒナ鳥の祖父と父

「祖父は、私が生まれる前の年に亡くなったらしく会ったことがないのですが、土建屋だったようです。父親は五人兄弟の真ん中で、小さい時から貧乏でひもじい思いをよくしたと言っていました。父親が中学生の頃は、部活動で野球部に入りたかったそうです。でも野球部はユニフォーム、靴、ヘルメット、バット等揃えるものがたくさんあり、お金がかかるといって諦めて、ユニフォームと靴だけでいいバスケットボール部に入部したとよく話していました。そういう風に語る父親の言葉には、耳を塞ぎたくなくなるようなときもありました。」

父親も十七年前に病気で他界しましたが、私たち子ども三人にひもじい思いはさせまいと一生懸命働いてくれて、習い事もたくさんさせてくれました。感謝しきれません」

ある地区の保護者から同じような話を幾度となく聞いたことがあります。

「貧しかったから、お金があまりかからない相撲がここでは流行った。別に相撲がしたくて始めたわけではなかった。ただ、それしかできなかった」

有名な力士を輩出し、それが地区の誇りになっていたと言います。

また、偏見に満ちたこんな話も聞いたことがあります。「地区の人間はすぐに職を変える。我慢ができない」これについて、ある地区のお父さんはこう言われました。

「職場で聞かされる、地区に対する悪口や差別発言に耐えられなかった」

なかには、「言い返せばいいではないか」「訴えればいいじゃないか」と言う人もいるかもしれませんが、それは所詮ヒトゴトの弁であり、「じゃああなたの職場は本当に風通しの良い、一人一人が大切にされおかしなことがおかし、正しいことが正しいと言える職場ですか?」と逆に聞きたいと思うのです。それでも我慢に我慢を重ねて職を全うした人もいたでしょう。でも、それができなかった人も数多くいたのではないのでしょうか。人は、する必要のない我慢を続けると、自尊心は大きく傷つけられ、心根はどんどん腐ってしまいます。だから、「ありのままの自分でいられないくらいなら……」と職を変えてしまうのではないのでしょうか。それを、「我慢ができない」と切り捨てていいものでしょうか。

上っ面の友達つきあい

「私が中学生の頃、友達の家へ遊びに行ったときです。玄関で友達を待っていたら、廊下の向こうで友達と友達のおばあちゃんが話しているのが聞こえてきました。「Kちゃん地区の子だからあんまり遊んではいけないよ」「そんなことわかってるから」と友達。私は一瞬うろたえました。聞かなかつたふりをしました。そのあとも何事もなかったように遊んでいたけれど、心にポカーンと穴が空いた感じがしていたのを

思い出します

上っ面の友達つきあい。そうではない本当の仲間づくりをめざして、これまで取り組んできました。そのためには、幼少期から発達段階に合わせた、人権の視点からの取組が必要で。

以前、就学前教育で、「手を洗う」取組を聞いたことがあります。偏見から生じる、「汚いから手をつながない」という意識に対して、「これだけみんな同じようにきちんと手を洗ってるんだから、そんなことを思ったり言ったりするのはおかしよね」と、子どもたちにわかるように迫っていく取組です。そして、つないだ手のぬくもりから、「人として同じなんだ」ということを理屈抜きに学びとっていくのだと聞きました。そんな、発達段階に応じた一つの積み上げが、最終的には上っ面ではない、本当の仲間づくりにつながっていくのだと思います。

「大阪だけの問題」ではない!

「私が大阪の大学を選んだのは、地元から脱出したかったからです。都会の大阪の大学に通えば差別から抜け出せるのではないかと思っていました。中学生の頃にあんなにたくさん学年全体で部落問題について勉強してきたのに、差別から逃げ出したい思いが私の中にはありません。でも、大阪でも部落差別はありました。クリーニング屋さんでアルバイトをしていた時、パートのおばさんが「あのあたりは地区やから近

づかんほうがいいで」「スーパードキドキ行くならこつちのスーパードキドキや。あつちはやめときや。あそここのころやからな」と……。私は平静を装っていたけれど、内心ドキドキしていました。「そうなんですか」必死で振り絞った一言でした。

ある時は、大学の友達と会話しているときに、友達が「地方から出てきてマンション借りるとき不動産屋さん」「うちは地区と違うから安心してください」って母親が言っていたわ」と言っていてケラケラお腹を抱えて笑っていました。また私は、「へえ」の二言しか言えませんでした。「あれだけ部落問題学習をしてきても……」と、ショックを受けたりもしましたが、それ以上に、直面した部落差別の現実には打ちのめされました。「卒業してからこんなことが……」と、激しい憤りに頭が熱くなりました。いるのにはないこととして、必要な存在として扱われる虚しさ。悔しさ。まったくのヒトゴト発言。やはりまだまだ全国的に人権学習を、部落問題学習を推し進めていかねばと思われされました。

福島県から自主避難をしてきた中学生へのいじめ問題が横浜だけの問題ではないように、これも決して大阪だけの問題ではないのだと思います。「うちでなくて良かった」ではなく、どこでも起こりうる、ワガコトの問題として捉え、考え、想像し、行動できる自分になっていくことが必要だと思うのです。